



第15回年会特集 第2弾 ～年会に参加して～

年会に参加された若手・中堅の研究者から年会の感想を寄せていただきました

▶ 私はパリ・ディドロ大学でポスドクをしている山口幸佑です。今回、年会参加助成を受けて年会に参加し、ポスター発表をさせていただきました。

年会参加にあたって、オンライン参加か現地参加の二つの選択肢がありました。もちろん私の場合は海外からということもあり、オンライン参加の方が簡便だったと思いますが、個人的には現地参加をして良かったと思います。まず、オンライン参加では質疑応答以外の交流はどうしても制限されてしまいますが、現地参加であれば、発表を聞いた後に発表者を追いかけて議論することができますし、研究者間の交流がより連鎖的に起こるように思います。実際に、今回のニュースレターの執筆に関しても、友人経由で広報委員の先生を紹介してもらったのがきっかけですし、もともと共同研究やオンライン学会で知り合った先生と話をさせていただいたり、逆に、今回知り合った学生さんに知人を紹介したりと、今まで個別でやり取りをしていた人脈が、一気にネットワーク状に繋がったように感じました。

ここまで現地参加の良さを色々と書いてきましたが、新型コロナウイルスの影響で海外の学会に参加するにはまだ心理的ハードルが高いのは事実です。私自身、「空港でどれだけ足止めされるのだろう…」と内心ドキドキしていたのですが、実際にかかった時間は30分ほどで、少し肩透かしを食らったように感じました。今の状況であれば、海外学会や国内学会の現地参加にもっと積極的でも良いと思えるようになり、少し心が軽くなりました。

今回の年会参加はエキサイティングな研究内容を触れられたことに加えて、オンライン参加と現地参加の良い点を再認識する機会を得ることができました。このような機会を得られたのも本研究会による年会参加助成のおかげです。この場を借りて、本年会会長である伊藤隆司先生や選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。



山口 幸佑
パリ・ディドロ大学
ポスドク研究員

▶ 今回、本年会に参加して、初めてポスター発表をさせていただきました。本年会では、新型コロナウイルス感染症のための制限緩和を踏まえて、ポスターセッションは対面で、講演は現地とオンラインのハイブリッド形式での開催となりました。

現地で聴く講演は、発表者の研究に対する熱意や、研究の面白さが直に伝わり、改めて対面の良さを感じることができました。また、現地だけでなく、オンライン参加者からも数多くの質問が挙がり、活発な議論の様子をみて、研究者の探求心、熱心さを強く感じることができました。さらに、自分の専門分野だけでなく、臨床研究などエピジェネティクス研究の多様性に驚くとともに、大変勉強になりました。特に印象に残ったのは、堅田明子先生の胎生期神経幹細胞に関する発表です。私の研究対象でもあるDNMT1が、DNA複製だけでなく神経細胞の適切な分化にも関わるという話を聴いて、DNMT1の詳細な制御機構に対して興味を持ちました。

ポスターセッションでは、様々な分野の先生方からご質問、今後の研究のアドバイスを頂戴し、とても活発な議論をすることができました。先生方の多角的な視点や情報を共有させていただいて、研究に対するこれまでの自分の視野の狭さを認識すると共に、自身の視野を広げるきっかけになりました。

最後に、今回現地参加をすることで、発表以外の場面で多くの研究者の方々と交流を深めることができました。感染対策を徹底し、このような素晴らしい年会を開催していただいた組織委員の皆様へ深く感謝いたします。来年度の開催では懇談会も行われることを願い、さらなる研究の発展を目指して日々研究活動に励もうと思います。

余談ですが、今回の参加は、私にとって初めての遠征でした。博多ラーメンと長浜ラーメンの違いを知ることができたことも、年会の良い思い出となりました。



菊地 杏美香
横浜市立大学大学院
生命医科学研究科
博士前期課程1年



▶ 今回、福岡で開催された第15回日本エピジェネティクス研究会年会に参加させて頂きました。私自身は、大規模な臨床情報、発癌前の非腫瘍組織の病理情報およびDNAメチル化情報を統合した解析を行っており、本研究会では「大規模検診コホートをを用いた胃発癌リスク因子の探索と胃粘膜に蓄積したDNAメチル化の解析」という題目でポスター発表させて頂きました。普段は癌の研究に従事されている臨床医、病理医の方が多く発表される学会に参加することが多い私にとって、基礎分野のエピジェネティクス研究をされている先生方と研究内容について議論させて頂ける本研究会は、非常に貴重な機会でありました。癌以外の疾患におけるDNAメチル化異常の研究をされている方や、DNAメチル化解析の手法について研究・開発されている方、化学や物理学の視点からエピジェネティクス分野の研究をされている方など、様々な研究者のご講演を拝聴することができ、大変勉強になりました。様々な分野の先生方と更に深い議論ができるよう、病理学をバックグラウンドに持った癌エピゲノム分野の研究者として自分の専門性をより一層磨き、研究に精進していこうと思いました。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、ここ数年間はオンライン開催となった学会・研究会が殆どだったかと思います。オンライン開催の場合、気軽に参加しやすい、後から講演を見直すことができるなどメリットもありますが、一方で他の研究者の方々とは対面で議論をしたり、交流させて頂いたりすることができる現地開催のメリットも今回の研究会を通じて再認識いたしました。一時期に比べ、新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着いてきているとはいえ、この状況下で研究会を開催されるにあたってご苦労された点もあったかと思います。本研究会の開催にご尽力頂いた関係者の皆様から感謝いたします。



臼井 源紀

千葉大学大学院医学研究院
分子腫瘍学
特任助教

▶ 今回、エピジェネティクス研究年会に参加しポスター発表をさせて頂きました。私は昨年から研究を始めた大学院生です。学会発表自体が初ということもあり、発表時間中も時間外も非常に緊張していました。これまで、オンラインで学会発表を拝聴させて頂いていただく機会がありました。どこからでも最先端の研究発表に参加できるという、オンライン学会の素晴らしい面に魅力を感じていました。しかし、どこか機械的に処理されてしまう議論に違和感も持っていました。今回、ハイブリット開催の研究会に現地参加する機会をいただき、初めての現地開催を楽しみにしていました。学会中、画面越しからは伝わらない先生方の白熱した議論や、研究への熱意を感じ、研究者同士の化学反応が周りに伝播していく様を目の当たりにしました。これこそが現地開催の意義なのかなと学会初心者ながらに思いました。自身の発表では、多くの方から鋭い質問をいただきました。議論中に他の方も加わり、議論がみるみる白熱していくような、現地開催でしか得られない貴重な経験をさせて頂きました。

各セッションでは、最先端の研究発表を聴き、奥深いエピジェネティクス研究に触れることができました。特に油谷先生のご講演にも登場した次世代シーケンサー (NGS)の発展には大変驚きました。年会のテーマは「原点回帰と Next questions」ということでしたが、本研究会発足の2007年ごろと、NGSの登場の時期が重なり、NGSはエピジェネティクス研究とともに発展してきた技術であると言えます。スマホの登場による日常生活の激変の時期とも重なり、私のような最近研究を始めた人でも、「原点回帰と Next questions」に関わる非常に重要な技術「NGS」がもたらした大変革を実感できました。また、「NGS」や他の技術が解決する Next questionsの先の未来を見てみたいと、研究への意欲が湧きました。

最後に、多様な研究分野の方と交流する機会をいただけたことに感謝いたします。来年もこの研究会に参加できるよう、自身の研究に取り組んでいきたいと思っております。



渡辺 新也

名古屋大学大学院
医学研究科 医科学専攻
修士課程2年



情報を求めています！！

研究員・ポスドク募集および他の研究会のお知らせなど、ニュースレターを利用して公開してみませんか。年会に関するご意見・ご感想もよろしく願いたします。お近くの広報委員に気軽に e-mail ください。

(代表) 近藤豊 (ykondo@med.nagoya-u.ac.jp)
佐渡敬 (tsado@nara.kindai.ac.jp)
斉藤典子 (noriko.saito@jfc.or.jp)
沖昌也 (ma4sa6ya@u-fukui.ac.jp)
中山潤一 (jnakayam@nibb.ac.jp)

日本エピジェネティクス研究会事務局

群馬大学 生体調節研究所
生体情報ゲノムリソースセンター
ゲノム科学リソース分野内
庶務担当幹事：畑田出穂，担当：岩田浩美
住所：〒371-8512 群馬県前橋市昭和町3-39-15
TEL: 027-220-8111
E-mail: jse-jimukyoku@ml.gunma-u.ac.jp